

小多機、看多機に

生活支援コーディネーター

地域力発見

宮下今日子
第125回
川崎市高津区⑤

所にSCを配置して、高齢者の生活支援体制を整えた形だ。確かに介護事業所ならば地域包括よりも小地域に踏み込めそうだが、慣れないSCの仕事を紹介の専門職がこなせるのだろうか？高津区の看多機「よろこび久末」（社会福祉法人美生会）を訪ねてみた。

梅ちゃん散歩は苦行？修行？

「最初は何をやってよいか悩み続け、とにかく地域を散歩してみようと思っ

た」と話すのは、梅村泰夫さん。現在、施設長の吉田聡子さんと一緒にSCを務めている。梅村さんの前職は、医療関係の地域まわりで、営業には慣れていたが、SCは営業とは違っ

て、何かスタンダードな方法も分からず、毎日ドキドキだったという。夕方、立ち話に出て来た人や、庭いじりをしてる人をねらって

「よろこび市」で生活維持

話しかけ、「怪しい者じゃないと思ってもらうのに必死だった」と話す。あなたは何をしてくれるのか、地域包括の職員や民生委員とどう違うのかと聞かれたり、「うん、いい」と言われたこともあったそうだ。

しかし、散歩をするうちに、大荷物を持って、痛い足をかばいながら、杖でゆっくり歩く高齢者を見たり、これから動けなくなっ

たらどうしようという不安の声も聞いた。買物が不便という地域課題が見え、移

動販売をしようか、パンを売ろうかなどと模索し、ようやく20年に「よろこび市」を事業所前でやり始めた。月2回欠かさず続けている。

「よろこび市」で生活維持

土曜日の10時から「よろこび市」を開くというので訪ねてみた(写真)。パンや野菜、小物、古着などを広げ、お手伝いの高齢男性や女性、看多機職員の80代女性の方も、持ち前の営業センスを

発揮して古着をすすめていた。地元で評判のパンが美味しそうだったので聞いてみると、パンを買いにバスで出掛けていた人が、もう

行けなくなってしまう。そこで、あの味をもう一度、とパンの販売を思い付いた。

これまでの味はこれまででの生活を取り戻すことでもある。「よろこび市」に行くことは生活の維持に繋がります。また、夜中に高齢夫婦の方が電話口で、「夫が具合が悪い、助けて」と言ってきた。SC

がすぐに対応し、その結果制度にも繋がった。自宅の冷蔵庫に貼ってあった「よろこび市」のチラシを見て電話してきたようだった。「お元気そうな高齢者は、今は元気でも突然起きる事態に対応できる環境が大切。暮らしの中に、私達やその後ろに包括や市がいてくれるという安心感も伝えられたと吉田さん。夜中の突然の対応は大変だが、地域と繋がる大切さを全職員と共有することも必要と指摘した。

開かずの扉を開いた?!

「梅ちゃん散歩」を続ける中で、細々と昔からやって

いる団地の中の小さな商店に声をかけると、救急車がよく来る、孤独死もあった、と教えてくれた。包括にも時々相談があったが、介入拒否もあり、民生委員も把握しきれず、実態がつかめない地域だった。この明石穂団地は、世帯数は380で、家族と同居が30世帯、あとは独居で、平均年齢はおよそ75歳。そこで、畑仕事の任人に声をかけ、会長の名前を教えてもらった。何か一緒にやれ

ないかと相談すると、会長は20人くらい集めるよ、と言ってくれ、団地で「スマホ教室を開く」ことができた。

この高津区は「ひびくす」地域包括支援センターが担当し、圏域には小多機(看多機含む)が5つあり、そのうちの2事業所にSCを置いてある。「スマホ教室」は、この2事業所のSCが呼びかけ、包括と行政、地域住民が協力して実現した。包括エリアに属する小地域が協力し合い、把握できなかったエリアを広げた好事例と言えらる。

看多機の地域力を活かす

看多機は、制度上、買物や美容院、盆踊りなど外出同行もでき、地域交流がしやすい。吉田さんは民生委員が開く地域の食事に参加してきたので、アイデアを貰えている。梅村さんは、散歩することで、まだまだ見えないエリアがあることに気付けたそうだ。住民を真ん中に置き、地域交流で今までの生活を続け、いよいよとなれば制度に繋がる、そういう地域づくりが始まってきたようだ。



写真右から、SCの梅村さん、吉田さん